

沙石集

無住一圓著。弘安二（1279年）起筆、同六（1283年）成立か。

「沙石集」卷第三の「六 小児の忠言の事」の一節。

岩波文庫「沙石集」上巻筑土鈴寛校訂より。なお、「本朝孝子伝」参照。

信州に、中昔、或人京より人を思ひて具して下りてける。京に物申す人あまたありけるかたより、文をくだしおこせけるを、あまた有りけるをかくし置きたるを、かかる事なんありと、告知らする者有りければ、夫是をたづね出して、我は物もえ書かず、讀まざりけるまゝに、子息の兒、戸隱とがくしの山寺に有りけるをよびて、母の前にてよませけり。母色をうしなひて肝心きんしんも身にそはぬ躰也こゝて。此兒心あるものにて、ただよのつねの文のやうにやはらげて、あまたの文を讀みてければ、人の和讒なりけりと思ひてやみぬ。この繼母餘りにうれしく思ひて、いたいけしたる翫あそび物取具して、文をやりける。

しなのなるきそぢにかくるまろ木ばしふみみしときはあ

やふかりしを

此兒返事に

しなのなるそのはらにしもやどらねどみなははきぎとおもふばかりぞ

かの関子騫に似たり。梵網の文にもあひて哀れなり。一切の男子は皆我父、一切の女人は皆我母なりと説けるにたがはぬ心なるべし。哀れなりける心なるべし。父の家をもつぎて侍りけるとなん。

註 岩波文庫本は国立国会図書館デジタルコレクション

ンに画像あり。72、73コマ目。DOI 10.11501/1040496